

「社会学における社会構成（構築）主義—ポストモダンの波が引いた後に何が残るか」

## 1. 社会構築主義の展開と実在をめぐるつまずき

社会学において、最初に構築（構成 construction）というタームを掲げて広く注目を集めたのは、バーガーとルックマンの『現実の社会的構成』（Berger and Luckman 1966=2003）だった。シュッツ直系の現象学的社会学の試みにマルクス、ミード、デュルケムの所説を接木し、当時米国の社会学理論の世界で優勢だった構造機能主義に対抗する「社会」の説明のパラダイムを提示しようとしたかれらの試みは、1960年代後半のいわゆる対抗文化の流れの中で、とりわけ若い世代の社会学徒の支持を集めることになった。実在（reality）を社会的に構成された現実（reality）に置き換える、というその基本姿勢は、おそらく同書が目論見（とりわけバーガーの志向は文化相対主義を経由して新保守主義に着地するというむしろコンサバなものだった）を超えて、多元的現実（multiple realities: cf. Schutz）の概念を解放的と見る“ヒッピー世代”の嗜好と共振したといえよう。そのあと、1970年代後半に、包括的な「説明」のパラダイムの提供よりむしろ実際的な経験的研究の進展を念頭に置いて提案され、一定の注目を集めることになったのが、スペクターとキツセの『社会問題の構築』（Spector and Kitsuse 1977=1990）である。シンボリック相互作用論と呼ばれるプラグマティズム（とりわけミード）の伝統につながる米国の地場の社会理論の流れに、エスノメソドロジーと呼ばれる新興の学派の洞察をブレンドしたかれらの社会問題研究における構築主義アプローチにおいては、クレイム申し立て（claims-making）とそれへの反応という具体的・実践的な人びとの活動が「社会問題」という現象を“作り出す”というテーゼを梃子にして、主流の構造機能主義を批判し、包括的な「社会システム」の“病理”ではなく、そうした活動の過程を経験的な観察の対象にしようという提案がなされた。かれらの提案は実を結び、社会問題の社会学の分野だけでも少なくとも200を超える調査研究が、このアプローチを拠り所に行われた。

その後、1980年代から90年代にかけて、「social construction」というタームはトレンド的なものになり、ジェンダー／セクシュアリティ研究、科学的知識の社会学（Sociology of Scientific Knowledge=SSK）、社会運動の社会学、感情研究、家族研究、医療社会学、社会心理学、教育学、人類学…といった多様な領域で、さまざまな意味合いをこめてこの語が使われることになった。その中には、上記の先駆的な二著と、つながりがあるものもあればないものもあった。それらは、大きく見れば、人文・社会科学の領域における科学主義＝ポジティヴィズムの正統化とそれへの反抗という歴史的な流れの一コマだったともいえる。が、同時に、欧州からのいわゆる現代思想の輸出に触発された、種々の「ポスト」（ポスト構造主義、ポストモダン、ポストコロニアル etc.）の波に尻押しされた一つの流行現象（ex. Burr 1995=97）だったとも総括できる。この「ポスト」の波は、上記の社会問題への構築主義アプローチに、一つのバイプロダクトをもたらした。それが、「存在論上のゲリーマンダリング」のクリティークとその後の論争（いわゆる構築主義論争）である（平、中河

2006)。SSK の分野でラトゥールと共同研究をしたこともあるウールガーが主導したこのクリティーク (Woolgar and Pawluch 1985=2000) によれば、「社会問題」を研究する構築主義者は、ある説明の対象を社会的な構築物 (非実在) として位置づけながら、その現象の構築をもたらす要因や社会的背景のほうは実在として取り扱っている。こうした恣意的で我田引水な存在論上の線引きが、構築主義的研究の説明様式 (ひいては社会学的な説明様式一般) を成り立たせているというのが、ウールガーらの結論だった。哲学的 (つまり認識論的および存在論的) な方法をめぐる議論にきわめてナイーブだった構築主義の社会学者たちは、このような問題提起につまずき振り回されて (中河 1999: 7 章参照)、経験的探究の切っ先を大いに鈍らされることになった。提題者が、英国のエスノメソドロジスト (言語ゲーム論を方法論上の補助線として使う) やカナダの哲学者ハッキングの仕事に関心を寄せるようになったのも、この構築主義論争が課した難問 (と当時は思われたもの) に対処する手立てを求めてのことだった。

## 2. 社会科学におけるポジティヴィズムの正統化とオルターナティブの提案

以上のような構築主義の登場を、より体系立てて把握するためには、それを社会学というディシプリンのより大きな歴史的流れの中に位置づけ直す (cf. Hughes and Sharrock 1997) 必要があるだろう。社会学には、その創生以来、自然科学のような科学的な学問になることを目指すポジティヴィストのアプローチ (コントを先達とするデュルケムがその方法論上の先駆者) と、それに抗する解釈的アプローチ (ウェーバー、ミード、シュッツなど) の両方を擁していた。しかし、20 世紀中葉には、論理実証主義の仮説演繹法の吸収やラザースフェルドによる計量の技法の整備などを経て、前者が社会学の調査方法論におけるオーソドキシシーの座を確保することになった (当時隆盛を誇ったパーソンズらの構造機能主義の理論も、“分析的実在論”という微妙な概念装置を設けてそれとの折り合いをつけた)。この科学主義の趨勢は、社会調査法の標準化と教科書化の流れの中で、とくに米国においては、その批判者の一部をも同じ科学主義の土俵に引きこむほどに (cf. 仮説演繹法以前の帰納法に時計の針を戻そうとするデータ対話型理論 grounded theory の試み; Glaser and Strauss 1967=1996)、大きなインパクトを誇った。しかし、1960 年代後半から 70 年代にかけて、解釈学や現象学、記号論や文化マルクス主義など、さまざまな思潮を足がかりに、いわゆる質的調査の方法論とリンクさせる形で、このオーソドキシシーへの“解釈的アプローチ”の反攻が始まった。とりわけ、いわゆる言語論的転回の産物といってもいいであろう、言語 (の使用) を社会学的な探究の対象の成り立ちにとって抜きがたいものとして位置づける視点が社会学に浸透したことが、そうしたポジティヴィズム批判の背を押した。ごく大まかに括るなら、1980 年代以降のいわゆる構築主義や、さまざまな現代思想的「ポスト」や脱構築、ナラティブ論のブームも、一つには、社会学が言語の構成的役割を強く自覚するようになったことの現われだったともいえよう。

ただし、そうした動きの帰結は、必ずしもハッピーなものとはいえなかった。少なくとも米国では、計量調査と結びついたポジティヴィズムのオーソドキシシーは、さまざまな批判をものともせずいまだに安泰に見えるし、その一方で、いわゆる質的調査の方法論は、

その素朴な自然主義 (naturalism) の段階から、言語論的反省を経てかえって、anything goes のジャングルの様相を呈しているように見える (中河 2001)。さらには、先に触れたウールガーらの社会問題の構築主義へのポストモダン・クリティークに見られるように、社会調査の方法をめぐる議論に哲学的な、存在論や認識論がらみの問題を持ちこむという行いが、経験的探究の学としての社会学に徒労と混乱とを招き寄せた。ウールガーらのクリティークを愚直に受け入れれば、構築主義というタームは、反実在論へのコミットメントを意味することになってしまう。存在論上の恣意的線引きをしない、ということが、ソシュール流のシニフィアン/シニフィエの区分の後者を消去することとして理解されるとき、すべてが表象もしくはテキストの作動 (一昔前の流行りことばでいえば“記号の戯れ”) として一元化される。さらにそこに、表象を行う主体の認識枠組みの問題が反省的に結び付けられるとき、表象を／がもたらす“権力”が考察の俎上にのぼる (人類学では、一時期こうした理路にそって、それまで営々と続けられてきたエスノグラフィーを書くという作業を脅かす“表象の危機”が語られ、深刻な方法的反省が呼びかけられた)。

こうした反実在論的な表象論の最大の問題は、社会学者が観察し、記述／分析しなければならぬはずの人びとの活動が、哲学的な立場へのコミットメントによって消し去られ、視野の外に追いやられてしまうことである。このような反実在論タイプの構築主義と等号で結んでも大過ないと思われる SSK の研究実践についてのコメントを、少し長くなるが、提題者が翻訳中のエスノメソドロジーの入門書から引いておきたい。「二つの (相互に関連しあった) 意味において、SSK のエスノグラフィーが採る構築主義のアプローチは、観察的ではない。第一に、科学の実践にたずさわる研究者は (そして科学者にかぎらずほとんどだれもが)、最低限、科学における観察を日常的に理解し、当たり前のこととみなしているのだが、SSK はそうしたものの存在を否定する。科学者は自然の世界を観察するのではなく、構成するのだと SSK はいう。なぜなら、社会的な意味と社会関係とを超えたところに存在する世界に到達できるすべなどないからである。その結果、発見や観察や事実などについて語る科学の日常言語は、構築主義者からは、『実在論者のイデオロギー』とみなされることになる。そうしたイデオロギーに絡めとられないためには、それを科学者自身ができるのとは根本的に違ったやり方で理解しなければならない。構築主義者のアプローチは、科学に対してアイロニックな立場にたつ。つまり、科学知識は、それにたずさわる研究者が考えているようなものではありえないと考えている。科学者は、科学が何に関するものなのか、その対象にどう到達するのかを知っていると考えているだろう。しかし、そう考えるのは間違いだと SSK はいう。／また、この点と関連する第二の意味でも、SSK によるエスノグラフィーは観察的ではない。構築主義の社会学者の科学知識についてのアイロニックな見方は、実際に科学がどのようにして成し遂げられているのかを詳しく調べた結果から導かれたものではない。むしろ、いったんアイロニックな姿勢が採られてしまうと、綿密で対象に通暁した観察は、社会学的には危険だとみなされるようになる。たとえば、ラトゥールとウールガーが、かれらが目撃した研究活動の科学的な性格について、よく知らないとはっきり認めていることは重要である。かれらは、実験室の作業において、文書や書類がもつ役割を強調する。にもかかわらず、かれらの本 [Latour and Woolgar 1986

—提題者注]のもとになるフィールドワークを行ったラトゥールは、以下のように、実験室の研究者が公刊のために書いた科学論文を理解できなかったと認めている [以下略] (Francis and Hester 2004: 185)。

たとえばヌアールの人たちの社会的な営みを観察し記述と分析を行いたいなら、まずはヌアールの言語を身につけ、フィールドに浸ることを通じて、かれらのさまざまな活動を実践の場で適切に理解する力 (competence) を涵養する必要があるだろう。科学者の多種多様な科学的活動を観察するにあたって、もちろん同じことがいえる。ラトゥールが意図的にとったというフィールドにおけるデタッチメントの姿勢は、じつは、ポジティヴストが掲げる観察の客観性についての主張と同根 (あるいはそのたぶん愚直な裏返し) の病弊をはらむもののようにみえる。

### 3. 健全な社会学主義の再興のために

要するに、振り返ってみれば、少なくとも提題者にとっては、構築主義をめぐるこの間の方法論上の論争は、社会学の経験的探究はどのようなものであるべきかというこのディシプリン創生以来の宿題に、どう答えを出すかということと重なりあうものだった。ポジティヴィストの調査法のオーソドキシシーはそれなりの方法的検討を経ており、その手順にそった知見の蓄積ももちろんまったく意義のないものではない。にもかかわらず、自然科学、なかんずく物理学 (その前は幾何学) をお手本にしようという野心に駆られたポジティヴィストの方法論は、社会科学の探究の対象になる現象の捉え方を始めとして種々の錯誤をはらんでおり、その結果、「社会的なもの」の調査研究に窮屈にすぎる制約を課してきた。その問題点は、従来、計量調査と質的調査のメリット/デメリットをめぐって、双方の実践家がほとんどルーティーン的に投げかわしあってきた批判 (網羅性 vs. 深さ、客観性 vs. 主観性 etc.) とは、別の水準に属する (そもそも、ポジティヴィストの立場に立つ質的調査だってありうるのだから)。社会科学におけるポジティヴィズムの問題点を包括的に検討する紙幅はないが (詳しくは Hughes and Sharrock 1997 参照)、その方法論には、たとえば、次のような困った特徴がある。(1) 一般的法則として示しうる要因間の因果関係の同定という見果てぬ夢をゴールにする、(2) 理論の言語で陳述される命題と観察データとの突き合わせ (操作化→命題検証) が調査手順の中心に置かれ、後者は理論中立的なものと思定される、(3) 言語の構成的で実践的な (その文脈依存的な使用によって対象を含む秩序が相互行為的に組織化されるという) 性格が見落とされている、(4) そのため、社会科学の対象となる現象は、自然科学の場合と違って、研究者による概念化に先だって、その対象を相互行為的に産出する人たちの概念化によってあらかじめ組織化されているという性格をもつ (Winch 1958 = 1977: 156-7) ことが見落とされる、(5) 仮説演繹法の理論重視のスタンスは、実在論を前提としつつ存在についての一種の不可知論の想定をとることを意味する (その意味ではそれはある種構築主義的だとすらいえる)、(6) しかも実際には自然科学の探究実践も、特段ポジティヴィズムの哲学的 (存在論的および認識論的) 方法論に立脚して行われているわけではない、等々。

それでは、ポジティヴィズムの調査研究の方法論に対して、どんなオルターナティブが

可能なのか。上に挙げた社会学の解釈的アプローチの伝統も、その後を襲った社会的構築や種々の「ポスト」や脱構築などをめぐる議論も、「社会的なもの」の経験的探究の方法と手順を十分に適切な形で指し示すことはできなかった、というエスノメソドロジストの指摘 (Garfinkel 1967; Francis and Hester 2004) に、提題者は同感する。社会的対象が、自然科学の対象とは異なって、研究者の観察以前に人びとによって構成されたものである以上、それらを構成する人びとの方法とそれに伴う知識を身につける (i.e. 言語ゲームができるようになる) ことを通じてしか、私たちは研究対象を経験的に観察することはできない。これは、現象学的社会学やシンボリック相互作用論が呼びかけてきた、人びとの主観性への注目や共感とはまた別の話だ。なぜなら、人びとが相互行為的に達成する出来事や事柄は、人の「心の中」に属するのではなく、公共的にアクセス可能 (available) な領域に属するからだ (Coulter 1979=1998)。こうして **games people play** を観察し、そこで人びとが使う方法を自省的に分析するというというエスノメソドロジーの探究の手順をとるとき、実在論や反実在論といった哲学的 (つまりはポジティヴィストがその出発点で忌み嫌った形而上学的) スタンスにコミットする必要はなくなる。構築主義論争において焦点になった「存在論上の境界の恣意的な線引き」も、研究者がそれを行うのを避け (因果モデルの説明図式によらない社会学的記述は可能である)、観察対象となる人びとの活動の中に立ち現れる現象として線引きという行いを捉えるなら、問題ではなくなる。法則定立から、人びとが使う方法の同定へ。これは、決して個別主義的でも主観主義的でもない、社会学の身の丈に合ったゴールの設定だと提題者は考える。このような方向での社会調査法の仕切り直しは、あえて自然科学をイメージ上のモデルにするのなら、物理学ではなく、地質学や生態学を想起すればいいといったふうに言い換えられるかもしれない。

さて、以上のような社会 (科) 学の方法論の仕切り直しにとって、エスノメソドロジーと並んで、ハッキングの業績は、きわめて教訓的だと思われる。その社会学にとって有益と思われる点を、とりあえず三つだけ挙げるなら、その第一は、『何が社会的に構成されるのか』 (Hacking 1999=2006) の3章での、自然科学の「社会的構築」をめぐる三つの係争点の整理である。そこでは、構築主義というタームと関連付けて出された論点が、たとえば唯名論 vs. 実在論 (あるいはハッキングによるより精密な命名に沿うなら構造内在主義) のように、哲学において長い歴史をもつ、しかも経験的には決着をつけがたいという意味で形而上学的な性格のものであることが明らかにされる。それによって、たとえばジェンダー研究やエスニシティ研究の分野での構築主義 vs. 本質主義の堂々巡りの応酬の不毛が得心しやすくなるだろう。第二に、ハッキングの「相互作用類」という概念は、先に挙げたウィンチの議論と重なる、自然科学と社会科学の研究対象の性格の違いの指摘としてきわめて重要である。その差異を踏まえて示される、ハッキング手製の動的唯名論やループ効果といった概念は、エスノメソドロジーの研究実践がそうであるのとパラレルの、実在論や反実在論といった哲学的スタンスにコミットすることなく経験的研究を押し進めるための方途として理解できる。第三に、ハッキングの統計学や多重人格や狂気についての事例研究は、エスノメソドロジーに現時点では欠けている (じつは社会問題の構築主義的研究ではある程度行われているのだが、知や言語についての洞察の枠組が不十分なためその

成果にいまいちの感がある)、「知の考古学」的な研究のお手本として有益である。社会学は、これまでフーコーを受容してきたが、その受容は往々にして思想的だったり運動的だったりして、フーコーの遺産を歴史的な経験的(あるいは歴史学でいうところの実証的)研究に生かすという方向での受容は比較的まれだった。ハッキングは、フーコーの調査研究における「使い方」を示す導師としてきわめて穏当な論者であり、その意味でも、その仕事は社会学徒にもっと広く読まれる必要がある。

最近、構築主義とは詰まるところ社会学主義の異称ではないかと、提題者は考えるようになった。私たちがその中にある世界のさまざまな事象や出来事を、「社会的に組み立てられたもの」として観察し説明するというのが社会学「ならでは」の学的営みだとすれば、マルクス物象化論やジンメル of 相互作用論、デュルケムの表象論といった古典社会学者の議論こそが、構築主義的発想のプロトタイプだということもできよう。ただし、そうした発想が、科学主義やそれに対するアンチとしての解釈主義に足を引っ張られて、十全な経験的研究の方法とプログラムにたどりつくのを妨げられてきたというのが、社会学のこれまでではなかっただろうか。とすれば、サブタイトルとして掲げた「ポストモダンの波が引いた後に何が残るか」は、むしろ、何を残すか、残したいのかという社会学徒への問いかけだと考えるほうが適切かもしれない。米国の社会科学がそうなりつつあるようなものの科学主義への回帰ではなく、方法的に健全な(もちろんコントのように誇大妄想的ではない)社会学主義の再興を、というのが、提題者個人の願いである。エスノメソドロジーや一部の良質な構築主義の研究の蓄積を梃子に、そうした方向へ事態が進むなら、構築主義というタームの隆盛が導いた方法論をめぐるドタバタ劇にも、それなりの意義があったということができるだろう。

#### \*付記

本稿の、とくに2および3の論点の多くは提題者の独創ではなく、英国のエスノメソドロジーの方法論的著作と、さらには『概念分析の社会学』(酒井、浦野、前田、中村 2009)や『エスノメソドロジー』(前田、水川、岡田 2007)に寄稿した日本の新進のエスノメソドロジストたちの洞察に多くを負っている(たとえば『概念分析〜』で示されるエスノメソドロジーとハッキングをつないで捉える視点や、「实在論にも反实在論にもコミットしないエスノメソドロジーの方法的立場」についての小宮友根のパーソナルな教示など)。ここに付記して、(とりわけ後者に)深く感謝したいが、しかし、オールドウェイヴであるがゆえの理解不足や錯誤の責任は、もちろん全面的に提題者にある。

#### 【参照文献】

Berger, Peter L., and Thomas Luckman, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, NY: Doubleday, 1966; 山口節郎訳『現実の社会的構成—知識社会学論考』新曜社 2003 [『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法』新曜社 1977 の改訳新装版].

Burr, Vivien, *An Introduction to Social Constructionism*, London: Routledge, 1995; 田中一

- 彦訳『社会的構築主義への招待』川島書店 1997.
- Coulter, Jeff, *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, London: Macmillan, 1979; 西坂仰訳『心の社会的構成—ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』新曜社 1998.
- Francis, David, and Stephen Hester, *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*, London: Sage, 2004.
- Garfinkel, Harold, *Studies in Ethnomethodology*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1967.
- Glaser, Barney G. and Anselm L. Strauss, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine, 1967; 後藤隆, 大手春江, 水野節夫訳『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』新曜社 1996.
- Hacking, Ian, *The Social Construction of What?* Cambridge, MA: Harvard University Press: 出口康夫, 久米暁訳『何が社会的に構成されるのか』岩波書店 2006.
- Hughes, John, and Wes Sharrock, *The Philosophy of Social Research (3<sup>rd</sup>. ed.)*, London: Longman, 1997.
- Latour, Bruno, and Stephen Woolgar, *Laboratory Life: The Social Construction of Scientific Facts (2<sup>nd</sup>. Enlarged ed.)*, London: Sage, 1986.
- 前田泰樹, 水川善文, 岡田光弘編『エスノメソドロジー—人びとの実践から学ぶ』新曜社 2007.
- 中河伸俊 『社会問題の社会学—構築主義の新展開』世界思想社 1999.
- 中河伸俊 「方法論のジャングルを越えて—構築主義的な質的研究の可能性」『理論と方法』29号, 2001, 31-46.
- 酒井泰斗, 浦野茂, 前田泰樹, 中村和生編『概念分析の社会学—社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版 2009.
- Spector, Malcolm, and John Kitsuse, *Constructing Social Problems*, Menlo Park, CA: Cummings, 1977; 村上直之, 中河伸俊, 鮎川潤, 森俊太訳『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて』マルジュ社 1990.
- 平英美, 中河伸俊編『新版 構築主義の社会学—実在論争を超えて』世界思想社 2006.
- Winch, Peter, *The Idea of Social Science and Its Relation to Philosophy*, London: Routledge & Kegan Paul, 1958; 森川真規雄訳『社会科学の理念—ウィトゲンシュタイン哲学と社会研究』新曜社 1977.
- Woolgar, Stephen, and Dorothy Pawluch, "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problem Explanations," *Social Problems* 32: 214-227, 1985; 平英美訳「オントロジカル・ゲリマンダリング—社会問題をめぐる説明の解剖学」平英美, 中河伸俊編『構築主義の社会学—論争と議論のエスノグラフィ—』世界思想社 2000, 18-45.